

令和元年度刊行 埋蔵文化財発掘調査報告書 要約

金沢市文化財紀要 3 2 4					
『出雲じいさまだ遺跡Ⅵ』					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
出雲じいさまだ遺跡	集落跡	古墳時代前期	土坑 2 基 小穴 7 基以上 溝 8 条	土師器、砥石 土師器、石器 土師器、砥石唐、円盤型未成品	SK01 は井戸か SD02 は H22 年度調査区 SD1047 に、SD03 は H23 年度調査区に SD1056 に続く
		近世	溝 1 条	土師器	H22 年度調査区 SD01 の続き
要 約					
<p>金沢市立戸板小学校増築工事に先立って平成 29 年度に実施した出雲じいさまだ遺跡の発掘調査報告書。調査地は戸板小学校の敷地内にあり、同校の新築工事に伴い平成 22 年度に実施した発掘調査区に隣接する。調査面積は 165 m²。</p> <p>平成 22・23 年度調査区で検出された古墳時代前期の溝につながる東西方向の溝が 2 条検出され、その覆土上層から完形に近い土器が複数出土した。</p> <p>平成 22・23 年度調査区で検出された竪穴系建物の痕跡はなく、同調査区でも多数検出された小穴が続いていることから、掘立柱建物か柵が設けられていたと思われるが、詳細は不明である。</p> <p>緑色凝灰岩の円盤型未成品が 1 点出土しているため、これまでの出雲じいさまだ遺跡の発掘調査結果と同様、集落内で玉器を製作していたと考えられる。</p>					

金沢市文化財紀要 3 2 5					
『金沢城下町遺跡（飛梅町 3 番地点）Ⅱ』					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金沢城下町遺跡（前田氏（長種系）屋敷跡地区）	城下町	江戸	井戸、土坑、溝、小穴	陶磁器類、土器、土製品、木製品、金属製品、瓦、石製品、ガラス製品	暦手碗 「VOC」銘ガラス片
要 約					
<p>金沢市立紫錦台中学校屋内運動場改築工事に先立って平成 25 年度に実施した金沢城下町遺跡（飛梅町 3 番地点）の発掘調査報告書。</p> <p>金沢城下町遺跡（飛梅町 3 番地点）は、藩政期においてはいわゆる加賀八家の一家で加賀藩重臣であった前田家（長種系）の下屋敷地の一角にあたる。その後明治 32 年から石川県立第二中学校の敷地となり、現在は金沢市立紫錦台中学校となっている。現存する石川県立第二中学校の本校舎は金沢くらしの博物館として一般公開され、平成 27 年には重要文化財に指定されている。</p>					

発掘調査は紫錦台中学校屋内運動場建設予定地のうち 924 m²を対象に実施した。大部分の遺構は地山直上で検出され、井戸跡、大小の土坑、溝跡、小穴等があり、藩政期の遺構が主体となるが、紫錦台中学校の前身となる石川県立第二中学校時代の建物基礎跡など一部に近代以降の遺構が見られる。注目される遺物には SK062 出土の文化 15 年銘暦手碗、SK014 出土の「VOC」銘を持つジンボトル残欠などがある。

金沢市文化財紀要 3 2 6

『北町遺跡』

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北町遺跡 (第 1 次)	集落跡	弥生、古墳	掘立柱建物、井戸、土坑、溝	弥生土器、古墳時代土師器、石器、金属製品、木製品	
北町遺跡 (第 2 次)	集落跡	弥生、古墳、平安	川、溝	弥生土器、古墳時代土師器、須恵器、石器	

要 約

民間宅地造成に先立って平成 19 年及び 23 年に発掘調査を実施した北町遺跡の第 1 次・第 2 次発掘調査報告書。第 1 次調査では宅地造成予定地のうち 500 m²を、第 2 次調査では同じく 140 m²の発掘調査を実施した。

平成 19 年度の第 1 次調査では桶枠を転用したと考えられる井戸や大型の溝 2 条を検出した。また、遺物としては弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器が多く見つかったほか、緑色凝灰岩製の管玉未成品などが出土している。

平成 23 年度の第 2 次調査では川や溝などを検出している。川・溝からは弥生時代終末期の土器が多く出土しており緑色凝灰岩片が共伴するほか、平安時代の須恵器などが混入している。

金沢市文化財紀要 3 2 7

『金沢城下町遺跡（兼六元町 1 5 番地点）』

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金沢城下町遺跡 (兼六元町 15 番地点)	城下町	江戸	石組、土坑、溝	近世陶磁器、近世土師器、近世瓦、金属製品、土製品	

要 約

有料老人ホーム新築工事に先立って実施した金沢城下町遺跡（兼六元町 15 番地点）の発掘調査報告書。発掘調査は事業予定地のうち工事によって遺構が破壊される 202 m²を対象として平成 30 年度に実施した。

調査地は金沢城の東側に広がる武家地の一角にあたり、寛文 7 年の城下町絵図には禄高 200 石の御馬廻衆に属する栗田久右衛門の屋敷地内に位置する。調査では区画を形成すると見られる石垣や石列のほか、建物柱穴と考えられる土坑を検出している。